

土地改良事業計画設計基準 計画「排水」改定（案）に対する御意見及び対応

○御意見の内容及び対応

番号	御意見の内容	対応
1	<p>p. 93の2行目以降に「計画基準降雨は、気象観測資料を用いて確率統計解析により得られた実績降雨に基づく確率降雨量に、気温上昇時の気候予測資料により求めた降雨量変化倍率（過去実験値と将来実験値の各確率降雨量の比）を乗じることを基本とし推定する。」とあります。</p> <p>ここで、実績降雨に基づく確率降雨量には、資料数が限られることから技術書p. 204「図-6. 3確率降雨量の推定精度と資料数の関係」に示されてるような真値に対する誤差が含まれています。それに対して、実験値に基づき確率降雨量を算定した場合、実験値は大量の資料数があることから真値に対する誤差は、実績降雨に基づくものに比べて小さくなると考えます。</p> <p>そのため、計画基準降雨は、将来実験値の確率降雨量に実績降雨と過去実験値の各確率降雨量の比を乗じて算定した方がより誤差の少ない値になると考えますが、いかがでしょうか。</p>	<p>今次改定に伴い使用する気候予測資料の実験値は、御意見のとおり実績降雨より多くの資料を得ることができますが、気候モデルにより計算されるため、仮定や近似に由来する系統的な誤差（バイアス）が含まれます。</p> <p>このため、使用する気候予測データセットの解説書においては、同じモデルで計算される過去実験値と将来実験値に同様のバイアスが生じるとみなし、両者の比をとることでバイアスの影響を除去できるという考えに基づき、それで算出された変化倍率を用いて将来予測をすることが一般的である旨記載されております。</p> <p>今次改定においては、このような考え方を踏まえ、算定手法を選択しており、原案が適切であると考えています。</p>

大変申し訳ございませんが、本意見公募は「土地改良事業計画設計基準 計画「排水」改定（案）」について意見・情報を募集するものであり、本案とは関係がないと判断される意見・情報につきましては、本意見公募の対象外となるため、お答えすることはできません。頂いた意見・情報につきましては、今後の農林水産行政の推進、より良い意見公募手続きの実施の際に参考とさせていただきます。